

タイトル	ことば・言語のあり方：「言語と文化」考(3)
著者	岡野，哲
引用	北海学園大学人文論集，15：1-46
発行日	2000-03-31

ことば・言語のあり方——「言語と文化」考(3)*)

岡 野 哲

Summary

On Being Homo Loquens

In looking at language in general, against a larger background of culture, civilization and technology, we have come to perceive as its vital elements not only mental and social aspects, but biological and temporal. Now we believe that it is necessary to beware of Bally and Sechehaye's version of Saussurean fallacy by which they distinguish *la langue*, *la parole* and *le langage* while regarding *la langue* as central.

At the same time, we have come to notice the deficiency in Chomskyan Universal Grammar, as basically disconnecting mind from body and locating language simply in mind. This theory is incapable of explaining how we have come to be what we are.

Language as a whole is a very complex entity, evolved and evolving as interlocking biological as well as social systems, elastic and learnable, adapted to any condition of existence for human beings, because of its peculiarly versatile fuzziness.

We, human beings, have been able to live and continue to live in our own culture and in the ever developing civilized society, because of being *homo loquens*. This means that we should look at language itself from an evolutionist viewpoint.

Key Words: *language, culture, civilization, evolution, theorizing*

序

「言語と文化」という課題にどの様にして取り組むかについて論考をすすめるなかで、まず、「文化」を言語から切り離して考察する過程において、文化を文明と関連付け、さらに、技術の概念を媒介として、その関連を明確にすることを試みた。岡野哲(1997)および岡野哲(1999)はそれであった。このテーマを掲げるとき、「言語」の視点を定めてから「文化」を考えることが多いという通弊¹⁾に気づいていた。さらに、「言語は文化である」というような命題の立て方²⁾がしばしば行われる事への警戒感を拭いきれずにいた。それ故に、言語とできるだけ距離を置いて「文化」を考えることに努めた。そして、今や、むしろ文化を立脚点として「言語」を考察することが可能になったと考えるに到った。つまり、「言語は文化である」という、比較的受け入れやすい命題を逆転して、「文化は言語である」という命題を立てたとき、これが容易に受け入れられないという事実から、「言語」のあり方、すなわち、我々の言語への対し方を考え直そうと試みるものである。

まず、前掲の二つの考察において明かにできた事のいくつかを要約するならば、

- (1) 文化が比較的小さい範囲の集団に認められる生存の形態であるのに対して、文明は、様々な文化の及ぶ範囲を超えて広がる普遍的な特性を持つこと；
- (2) 何等かの意味で優位かつ支配的な文明は、諸文化を変質・衰退・滅亡させるような影響力をもつこと；
- (3) 文明が文明としての影響力を失うときは、文化として多様化しながら生き残ることがあること；
- (4) 文明はより優れた技術をもって諸文化に影響力を及ぼすこと；
- (5) 文明が衰退するように、技術もより優れた技術によって凌駕されて、全く消滅するか、あるいは、文化的な遺産として、価値を保ち続けることがあること；

- (6) 技術, 文明, 文化は, 人が生存し, 生存の条件を維持ないし改善する過程を表わし, そのような機能を果たさなくなったときは, 固有の価値を失い滅びざるを得ないこと;
- (7) 技術, 文明, 文化の種々の側面は, 人の自然との関わり方に関連し, 自然に属する生命体としてのヒトを, 生命体であると同時に, 単なる生命体以上のものたらしめていること;
- (8) 技術, 文明, 文化の種々の側面は, 人が意識的・無意識的に学習し, その結果を伝達ないし伝承するものであること,

などであった。

更に論を進めて, 文化から距離をとりつつ「言語」の考察を試みるとするならば, 上記の項目を動かすことなく, 新たな論点に立ち入らなければならぬ。以下の各節は, むしろ, 言語を文化・文明・技術と対照させるに必要な着眼点を標題として組み立てられている³⁾。

I. 経済行為 — クレオール化 — 言語政策

今日の近代文明社会においては, 異なる言葉を用いる人々の様々な場面での接触が日常的に認められる。むしろ, そういう事が起こらない状況は特異な環境であるとさえ思われる程である。ひとえに, 人類社会が近代技術文明の影響に覆われている故である。

政治家や経済関係者, 学術・技術の専門家, スポーツや芸術の関係者が, 国際的な場を設定して協力的に交流するという状況は, 前世紀までは希なことであったであろう。そして, アジア大陸の東端に点々と連なる日本の様な島国においてさえ, 外国語を話す人々との接触は決して珍しい事ではなくなった。さらに, ヨーロッパでは, 過去の苦い戦争体験から, 諸国・諸民族を統合して, 殆ど国家とさえ言えるような超大型の連合体, ヨーロッパ連合 (EU) を形成した。また, これほどの組織化が認められなくとも, 定期的な, 地域ごと, 領域ごとの協議は珍しいことではない。

このように利害の共有と対立を伴う文明の状況から, 言語のあり方も,

かつては考えられないような位置づけを与えられることになった。異なる言語の話し手相互の間で、どの言語を用いるべきかは、当然、問題となる。国際連合やヨーロッパ連合では公用語が選ばれ、話し手の母語の如何を問わず、これらが利用される。母語が公用語である話し手が、そうでない人よりも優位に立つことは避けられない。また、公用語が一つに限定されない事から、それらのうちどれを選ぶかという問題と同時に、会議や行事に必要な文書類が、公用語の数だけ多くなる。また、複数の言語を操る能力のない者、また、公用語をどれも理解できないもの、あるいは、国家を代表する立場にある者が公用語ではなくて、自分の母語(国家語)を用いる事がむしろ適切である場合など、複数の公用語とそれらの言語の間の通訳が必要になる。会議などが緊急性を帯びる場合には、さらに多数の同時通訳技能者の必要に迫られる。これらの問題は、多大な経済的負担なしには解決できないのである⁴⁾。

近代科学技術の進歩は、通信技術の革新をもたらした。電子メールやインターネットは、社会の公的な場においてばかりでなく、私的な場面においても活用されるようになった。これらの通信技術は、人々がこれを利用する際に用いる日常の言葉に影響を及ぼしている。電話でさえも、かつては置いてある場所を移動させないのが原則であったが、所を嫌わず携帯電話で会話を交わすことが日常的になってきた。そして、携帯電話での会話では、しばしば、相手との対人関係が限られているために、言葉遣いへの影響が認められる。電子メールの言語は、キーボードを打つことにより生成するのが普通であるが、結果として出来上がるテキストは書き言葉である。しかし、ペンや鉛筆、筆を用いる書き言葉との違いが現れる⁵⁾。母語を異にする人々の間では、さらに、選択する言語の問題があり、相手を特定しない通信においては、グローバルな言語として英語が用いられることが多い。

誰でも知っている以上の状況は、結局、最近の先進的科学技術文明の所産で、その影響は言葉遣いの違いとなって現れ、言語運用の諸特徴に新しい要素を加え、言語そのものの本質にさえ浸透しかねないのである。

以上の考察は、年月時代を過去に遡るに従って当てはまらなくなる。かつては光ファイバーやコンピューターが存在せず、せいぜい、電話を用いることが、最も進んだ技術の段階であった。さらに、歴史を振り返れば、今日の文明は、印刷術の発明⁶⁾に負うところの大きいことが明らかになる。それによって、人々の言語生活は大きく変化し、知識・情報の伝播が著しく促進されたのであった。しかし、印刷術以前に文字を創出するという進歩がなければならなかったことは言うまでもない。それ故に、文字を持たない話し言葉のみの世界が地球上にあった事を確認し、そのような段階において、言葉が今日の近代技術文明のもとにおける言葉と異なるものであったか、それとも、根底において共通のコミュニケーションのプロセスがあったかどうかを思い描く必要がある。

すなわち、文字を持たない異言語の話し手どうしが、生存の必要に迫られるか、ないしは、より快適な生存の条件を見いだすために、言語の違いを超えて平和裡に（時には、敵対的に）コミュニケーションを図ることは、大いにあり得たのである。今日においては、文字はおろか、遥かに高度化した技術がここに介在するが、そのような一切の条件がない場合、異言語の話し手が、互いに対等であることを認めての交流が起こり、それが互いの利益に即しているならば、言語が異なることを、何等かの方法で克服しつつ交流を成り立たせることができた。

その例は、生存の必需品を手に入れるための物々交換の場面に認めることができるであろう⁷⁾。特に重要なことは、交換される物品が価値の上でバランスが取れていることを確認する方法である。共通の言語をもっていれば、この何等の問題もないコミュニケーションの過程において、表情や身振り・手振りから始めて、結局は、物品の名称を互いに知り合うに到り、異言語の断片の意味を適切に解釈して了解を成り立たせるに到ったに違いない。この様な〈ことば〉の利用が、たとえ、非文明的であるとしても、母語を異にする人々が、必要なコミュニケーション行為を成立させた成果は、認めなければなるまい。

しかし、異言語の使用者の一方が優位に立ち、他方は相対的に弱い立場

にあるという状況がしばしば起きる。岡野(1999)で考察したように、優位に立つ文明が、結局、劣位の文明を凌駕し、時に壊滅的打撃を与えてしまう可能性がある。劣位の文明に生きていた人々は、多くの伝統的技術を放棄して、新文明のもとで生存を続けるのであるが、言語についても、優位の言語を可能な限り受け入れて、社会生活の変化に即応せざるを得なくなる。古くから、そのような言語変化の歴史的事実が、知られている。また、十五世紀以来、ヨーロッパ文明が世界制覇に殆ど成功した状況において、被支配者は支配者の言語を学習し、これを第二言語として使用することによって、より進んだ文明に順応し、生存の条件の向上を図ったのである⁸⁾。

これは、アフリカ、アジア、南北アメリカの各地域の植民地化の過程で生れた現象である。その場合、商取り引きのような相互的に比較的对等な条件を必要とする場面では、ピジン語・クレオール語化という現象が起きる⁹⁾。ピジン語に関しては、きわめて限られた使用域に現れる臨時的な現象であると云うこともできる。従って、短期的に使われて、記憶に残っていないピジン語さえなしとしない¹⁰⁾。しかし、異言語話者の接触が長びき、恒常的な状況が生まれると、ピジン語的な言葉の使用領域が広がり、単に関与者(participants)が商取り引きなどの当事者に限られなくなるばかりでなく、レジスターが拡大する。商取り引きの場面以外の多様な社会的状況の中で、この種の言葉遣いが各所に流通するに到る。それが、一般の社会生活に広まってくるときは、家族のメンバーの間にも、徐々に浸透して定着する¹¹⁾。年長者の中には、この変化に関与しない者もあるであろうが、一方、家庭外の社会生活から新しい異言語使用を持ち込む年長者は、ピジン語的な言葉遣いの家庭での定着に積極的な役割をはたすであろう。かくて、世代の間で、新しい異言語の使用と伝承が起こる。

この様にして、始めは、一時的な「ごたまぜ状況」¹²⁾であった言葉遣いから、時間を経るにしたがって、次第に共通に認められる新しい言葉遣いへの転化が生じる。家庭のような狭い社会でも、家庭を取り巻く共同社会の広い範囲でも、この新しい言葉遣いが認められて定着する。それは、共通

に容認される語彙項目、文法、発音の仕方を備えた新しい言語である。このようにして成立したクレオール語は、最終的に国家の公用語にまで地位を高めることさえできる。その例として挙げられる言語に、パプアニューギニアのトクピシン語¹³⁾がある。

さて、社会における経済活動や異言語接触の問題を離れて、我々の母語についても少し注意を払えば、個人的なレベルにおける同じような種類の同化による変化・変容を日常的に観察することができる。変化の中には気まぐれで理由がはっきりしないもの、従って、短命なものもあるが、比較的多数の人がこれを好ましいと認めると、持続的に使われることによって新しい言葉遣いとして力を得るに到る。

すなわち、ある地域で普通に通用している言葉遣いが、今日の活発なコミュニケーションの条件に促されて、他の地域にも広まり、その使用地域を更に大きくする。クレオール語の発生に見るような「ごたまぜ状況」は、地理的方言の境界を越えて起きる¹⁴⁾。日本では関西地方の言葉遣いが、テレビの娯楽番組などの影響で関東以北にまで広まっている実態を認めることができる。また、同じ条件が作用して、一部の職業方言であった言葉遣いや素性の正しいとは云えない隠語が、日常語の中に現れることも事実として認められる。

母語に認められるこの「ごたまぜ状況」の相当部分は放置され、自然に消滅するのを待つという態度をとる一方では、一定の言葉遣いが正しいとして、その規範に沿わないものを排除しようとする力が働くことが、特に、文明社会では認められる。その最も著しい例は、フランスにおけるアカデミー・フランセーズの役割である。今日でも、フランス語の純粹さを守るために、フランスでは商品名に英語の使用を許さないという法律さえ制定された。英語社会ではそのような規制はないが、一部の人々の間には上流中産階級の伝統的な英語を好む傾向が消えていない¹⁵⁾。わが国では、今日、国語審議会が漢字制限、送り仮名、ある種の言葉遣いを問題として論じている。その結果が、学校教育や新聞などの公的な出版物での言葉遣いを制

約している。

このように、言葉遣いの自然な変化を規制しようとする力が社会に存在する場合の様々な形態がある。子供に対して親が言葉遣いに注文をつける場合がある。その時、親は親としての権威に賭けて子供の振舞いを矯正するわけである。子供に対してこのように振舞う親が何を根拠としているか、単なる趣味であるか、子供の成長の目標を示したのか、単に社会の制度に従うことを教えたのか、様々な根拠があろうと思われる。ただ、それが彼らの家庭内の慣習の域を出ない規制であるならば、それぞれの家の仕来りに従ったままで、他の家々には違う仕来りがあるのを妨げないであろう。それは、岡野(1997, pp.23ff.)註33)に引用した山崎正和氏の考察にあるごとくである。子供の言葉遣いの規制がこのレベルにおいて捉えられる限り、それは、個人的な習慣か、ないしは、家庭での習慣にとどまる。しかし、もし、親が加える規制が一般社会の規範に従うことを求めているならば、子供は共同社会の一員として適切な言葉遣いを自覚的に教え込まれることになる。それは、他の様々な行動様式と同様に、比較的小さい共同社会の有する文化的特徴に較べることができるレベルで起こった出来事である。

子供には、また、年齢差の少ない同じ世代の子供達と共有する世界があり、そこから無言の規制を受ける。親の世代とは違う言葉遣いが受け入れられ、そのことによって同じ世代の仲間に加わることができる。これも、ある意味では、その世代という特別な区切り方をした社会集団の文化的特徴であろう。すなわち、若者は、他の世代と異なる言葉遣いによって自分達を主張する。例えば、北海道の男子高校生などが「なまら」という強調の副詞を多用するが、これは大学へ進学すると使わなくなるスラングである。彼らは、それを他の世代に強制せず、また、他の世代が用いることを望まない。自分達が他の世代と異なることの象徴として、特異な言葉遣いを消極的に好むにとどまる。

同じことが特別な職業集団などにおいても起こることは、言を俟たない。

これに対して、それぞれの教育制度のシステムを発達させている近代の

文明社会においては、比較的若い年齢段階から、子供をその制度の中に組み入れることが法律により強制される。制度の上での違いはあるにしても、国家が法律によって定めた基準に従って学校が設けられ¹⁶⁾、子供達は家庭の外での特殊な社会生活を経験する。そこで、上述のような同じ世代間の接触と同時に、教師を通じての国家的な規範の強制を受ける。言葉遣いに関しても、家庭で覚え、身につけた母語ではなくて、国家が適切であると認めた言葉遣いを学習しなければならない。日本では、「国語」¹⁷⁾を学習しなければならない。これは、子供が家庭で身につけた母語とは同一視できないものである。

学校では、家庭で用いる言葉遣いをすることが許されないことを子供は知るであろう。母語は子供がその中で生きている文化の一部であり、身近な誰でもが容認する方言である。それは、誰でもが自分に内在すると感じ、平生は意識することなく暮らしているものである。部外者も、その文化の中に入れば、直接に経験できる生きた言葉である。しかし、学校で学ぶ「国語」は、自然な家庭環境では使いにくい言葉遣いであることが多い。それは、家庭の外にあり、日常の個人生活の外から与えられるものである。それは、意識的にあらためて学習すべき外在的な「言語」である¹⁸⁾。

恐らく、これは日本だけの状況ではないであろう。連合王国(イギリス)でも、生得の母語ではない英語があり、それは「学校英語」¹⁹⁾である。母語としての英語は、個々人にとっては方言である。

それでは、国家が強制する「言語」が完全に学習され、その国家のメンバーは、全く同じ言葉遣いをするようになるであろうか。誰でも知っているように、そのような事は起こり得ない²⁰⁾。なぜならば、そのような「言語」としての日本語や英語の教育は、日本語の方言や英語の方言を子供が既に相当程度習得しているからこそ可能なのである。「国語」は、それぞれの日本語の方言の能力を基礎として学ばれるのである。学校英語においても、その他の国の正規の母国語教育においても同様である。

かくて、文明国家社会に於ては、生活文化に根ざした方言と、学校など

の国家機関によって教え込まれる「言語」との「ごたませ状況」が起きる。日本人であるからといって、全く均一の日本語（日本の国家語）を話し、使う訳ではない。無論、個人間の共通性の大きさと、方言的な個差の大きさの違いは相対的である。つまり、個人により、方言的な要素の多く見いだされるような言葉遣いをする人もあれば、国家語として的人為的な規範により大きく傾き、方言的な要素を失った人もあるという事である。

このような意味での「言語」は、比較的小さい集団に根ざした文化を超えた表現様式であり、より一般的である。地方的文化を乗り越えて、時には方言を蹂躪して拡散し、支配する。そのために方言は変質し、形を変え、その特質の多くを失う。それは、文明が様々な文化を飲み込んで広まるのに匹敵する。このように、「言語」としての国家語は、あくまでも外から来たものである。それは、方言と共通性を有するが故に意識されないことが普通であるけれども、本来的には個々人を超え、個々人にとって内面化されない部分的特徴を、不可避的にもたざるを得ないのである²¹⁾。

II. コミュニケーション — 異言語の習得

以上の考察からある程度は答えられる様に、母語が「技術」であるというような考えは生まれてこない。母語は外在する「言語」としてではなく、自然の内に、意識以前に、身につけた行動の能力であり、その発するところは、個々人の心に内在する特殊化された心理的・生理的作用であると言えよう。ヒトは、母親の胎内における発達のある段階において、聴覚を有するにいたるといふ²²⁾。そして、胎内において、羊水の中に浮遊しながら、母親の心臓の脈動、血流などの音、さらに、母親の体外で起きる音響現象を受け止めているという。つまり、母親の話す言葉の音声の何等かの様相を聴覚的に経験していることになる。胎児が我々の生きている空間に姿を現し、呼吸を始める段階では、既に、これだけの準備が出来ていることは明かである。これをもって、ヒトは「技術」をもって生まれるということ、誰も考えない。

しかしながら、生後数年の間のヒトの成長は、単なる生き物としてのヒトの成長にとどまらない。云うまでもなく、それは人としての成長でなければならない。すなわち、人間社会が要求する様々な能力の獲得を意味するのである。そして、その能力の中に〈ことば〉の能力が含まれる。

〈ことば〉の能力は、ヒトが生まれながらにして持っている直立歩行の能力に等しいと論ずる向きがある。確かに、ヒトは生まれた直後から直立歩行ができるのではない。同様に、ヒトは生まれた直後から〈ことば〉が話せる訳ではない。直立歩行の能力は、ヒトが生まれながらにして持っている遺伝的形質である。複雑な遺伝子の何処かに、どの様にしてか組み込まれている仕組みによって、直立歩行は可能になる。これは、ヒトがヒトである限り、普遍的に当てはまる事実である。

〈ことば〉においても、遺伝子の仕組みが関与する。嬰兒における骨格、特に顎と口腔・鼻腔と咽頭・喉頭や頭骨・顎骨などの構造は、生後一年ばかりの間に著しく変化する。この変化は遺伝的な根拠によって可能になる。高等な類人猿は、ヒトと殆ど変わらない遺伝子の中に、この仕組みを生み出す要素を欠く故に、ある側面で相当に高い知能を発揮することがあるにも拘らず、〈ことば〉を発することはできない。幼児が〈ことば〉を話せるようになるのは、それを可能にするヒト特有の遺伝子の構造のためである。その意味では、ヒトの〈ことば〉を話す能力は遺伝的形質によるものである。しかし、これはアリストテレスの云うような「技術」ではない。

また、人は〈ことば〉を話すために、身体の様々な器官を駆使する。呼吸器官や消化器官も〈ことば〉のために利用されるが、それが可能なのも遺伝的な根拠があつてのことである。更に、人は生活を共有する仲間の発する〈ことば〉が理解できる。これは、単に聴覚器官の働きによるだけでなく、音声を音声以上のものとして把握する大脳の働きによるものである。また、生活を共有する仲間に向かって〈ことば〉を発するのも、同様に大脳の働きがなくては不可能である。このような大脳の作用も遺伝的形質である。従って、他人の〈ことば〉を理解し、他人にむけて〈ことば〉を発する能力は、断じて「技術」ではない。

このような行為としての〈ことば〉は、成人した後にも一部は発達し、一部は衰えるであろうが、遺伝的能力である限りにおいて、技術ではあり得ない。すなわち、遺伝は生命体に起きる自然現象であり、ヒトが生き物として進化した結果、その意志や希望と関係なく、獲得した能力である。

〈ことば〉は、自然に根ざすとは言いながら、自然現象そのものでないことは言を俟たない。ヒト以外の生き物の個体間コミュニケーションの存在は周知の事として考えをすすめるならば、〈ことば〉は、ヒトにおいて最も複雑で高度なレベルのコミュニケーション過程である。ヒトのコミュニケーションには、〈ことば〉によらない側面があることも承知の上で、〈ことば〉というコミュニケーション過程によって、ヒトは人になるのだとさえ云うことができる。すなわち、単なる生き物ではなくて、生存のために共同社会を形成し、そのメンバーの協力によって共同社会が維持されると同時に、共同社会の仕組みがメンバー個体の生存を保障するのであるから、そこで生じるメンバー相互の関係を合目的的に機能させるような装置を必要とする。そのような装置としての〈ことば〉は、もはや、単なる自然現象ではあり得ないのはもちろん、人を人間として考えなおす契機でもあると考えるのである。

このように、〈ことば〉が社会現象である以上は、該当する共同社会における構成員同士の関係を取り結ぶ、様々な仕組みのなかに〈ことば〉が加わることになる。人間社会が各種の動物社会以上に複雑化した構造を有するものである事を考えれば、〈ことば〉が生き物としてのヒトの諸能力を基礎としながら、諸種の動物社会とはレベルの違うコミュニケーションの手段と様態を展開して見せることは当然のことであろう。人間を諸種の生き物との関連から切り離すのは適当でないけれども、人間社会独特の視点から、共同社会構成員を結ぶ紐帯としての〈ことば〉の機能を措定する一般的な考え方を受け入れることに躊躇する必要はない²³⁾。

この段階に到れば、〈ことば〉という行為において、遺伝的形質に根拠を

もつ特徴を遥かに超えた様々な機能的要素を認めなければならない。いわゆる「交感的言語使用」²⁴⁾は、共同社会のメンバー同士の非敵対的協同的存在の確認である。必要とする場面であるにも拘らず、これを怠れば、そのこと自体、敵対的非協同的關係の意味を惹起しかねない。

また、「遂行的言語行為」²⁵⁾に於いては、その行為があってはじめて、社会的な一定の出来事が成立するという意味で、特定の〈ことば〉が際だって重要な社会的機能を果たす。

「交感的言語使用」に関しては、家庭などという小さい単位の構成員の間で、日常的に習慣として見いだされるものがある。その習慣は幾つもの世代にわたって長く受け継がれる強固な伝統をなすものもあり、時代の推移と共に変形、あるいは、消滅するものもある。「遂行的言語行為」についても、比較的簡略化され得るものと、強い伝統に拘束されるもの、逆に、省略可能なもの、あるいは、他の形式の言葉遣いにより代替され得るものなどがある。

いずれにしても、この種の〈ことば〉は、社会的存在としての人が身につけるべき能力である。どの様にして身につけるか、学習するかは一様に定まっている訳ではないが、最低限の能力は、何等かの仕方で獲得しなければならない。このような一般的なレベルで論じる限りでは、「交感的言語使用」や「遂行的言語行為」の技術を口にしても差し支えなからう。しかし、云うまでもないことながら、これは、自然科学的技術にいうところの技術 (technology) ではない。遺伝的形質そのものとしてではなく、生まれて後に人として身につけた能力である点では、技術との共通点を認めることができるが、〈ことば〉の能力は、「技術」と区別して、むしろ、スキル (skill) とでも云うべき能力である²⁶⁾。以下、自然を対象とする技術に対して、社会的関係における技術をスキルとみなすことにする。

念のために、スキルの概念に含まれる因子を確認すると、それは、何かをしっかりと成し遂げる能力である。「しっかりと」言うのは、確実さと正確さを意味する。しかし、能力としては、巧みに成し遂げる実践的知識の裏付けを伴うもので、その意味では、専門的実践的知識でもあり得る。こ

の実践的知識は、訓練・練習を通じて獲得ないし学習され、何等かの役割を果たすという意味で実践的であり得る²⁷⁾。この様に見てくると、〈スキル〉の中には、〈ことば〉を離れて、岡野(1999)で考察された様々な概念、すなわち、技能・技(わざ)・技法・技巧・技芸・腕前・骨の概念が、ことごとく含まれるということが出来る²⁸⁾。ただ、異なるのは、自然科学的「技術」の概念である。アリストテレスが技術についていうところの「自然のなすところを模倣する」能力は考えに入れることはできないであろう。しかし、「模倣」は、「制作的認識」の一部として、訓練・学習の過程で起きるものであるから、これを排除することはできない。また、「自然がなしとげえないところの事物を完成させる」か否かは、事によりけりであろう。しかし、スキルが技術と同様に、学習によって獲得され、有目的的の行動を導出することには変わりがない。

また、技術の達成度に様々な段階があり得るように、スキルにも、他の追随を許さない洗練の程度があり、他方では、きわめて初歩的な、未熟な段階にとどまっているものもあり得る。

〈ことば〉という行為について、スキルの概念を当てはめるならば、芸術の域に達した〈ことば〉がある。しかし、日常の〈ことば〉には、誰でもが繰り返し発話する慣用表現が多い。それも、必要な要素として学習した結果であり、日常的な場面において、一定の機能を果たすことが、同時に学習されている。異なる方言と接触するとき、違和感を覚えながら、時にはそれを模倣して学びとり、相手に同化することが必要である。ピジン語を使用しはじめた人は、それを学びとって使う必要に迫られている。外国語にはじめて接した場合、全く、〈ことば〉としては受け入れられないという立場にあるのが普通であろう。しかし、外国語と云えども、それを学習し、何等かの程度までは〈ことば〉として発話するスキルを獲得することは不可能ではない。

III. 言語は文化でないか

この様にして、〈ことば〉は「技術」と共通の特徴を持ちながら、なお、それと区別されるべき理由は、「技術」が自然とより直接的に結び付くのに対して、〈ことば〉が自然とは間接的にしか関連しないというところにある。〈ことば〉は進化の結果としての人の社会的機能であるとさえ云えるであろう。

しかし、ヒトすべてが人間社会を形成するという普遍的事実に伴って、〈ことば〉が普遍的現象であるということを考えるとき、それは、文化に対する文明の普遍性と同様に考えることができるであろうか。そうではない。文明は、特定社会に発生して、技術その他の力を媒体として、異なる文化を超えて拡散・伝播するという点で相対的に普遍的であるが²⁹⁾、〈ことば〉は、それが欠如する人間社会が存在しないという意味で、絶対に普遍的である。〈ことば〉は、全ての人間社会に起きる現象である。

しかし、文明は、そのより高度な技術の合理性によって、それが伝播した社会の様々な側面に影響を及ぼし、人々の生き方を変化させ、それまで伝承されてきた種々の習慣を変え、消滅させてしまうことができる³⁰⁾。つまり、人々の作り上げた共同社会の文化を変質ないし衰退させ、あるいは滅ぼしてしまう。しかし、その際に〈ことば〉が消滅するということはない³¹⁾。人々は、言葉遣いにおいては変化を見せながらも、なお〈ことば〉を話しつづける。〈ことば〉そのものが著しく変質するということはない。人は口を動かし、声を発し、耳を傾けて聴くことをやめないであろう。

それは、生き物としてのヒトが、既に、社会的存在としての人となっているからである。行為としての〈ことば〉を紐帯として、互いに関係を取り結ぶ仕組みを失うことがないからである。しかしながら、人が関係を取り結ぶ仕組みとしての社会は、無機的な自然現象のように凝り固まったものではない。この地球上にヒトが出現して以来、人として取り結ぶ相互関係は、甚だしい変遷をみせてきた。考古学が証拠立てるような太古の人間の生存状況から現代に到るまで、様々な社会構造の変遷があった。その数

十万年の間、〈ことば〉が話されてきたことを想定できないということはあり得ない。しかし、それは、話される言葉遣いが変わらなかったということの意味するものではない。20世紀を終えようとする今日において経験している言葉遣いの変化をみれば、言葉遣いが、過去のどのような時点に於いてか、無機的な自然のように不動であったなどという考えをもつことはできない。言語史の研究が子細にわたって教示してくれる諸事実を俟つまでもなく、当然のことと考えなければならない。

この様にして、〈ことば〉の普遍性を離れて、言葉遣いに視点を移すとき、個別的な諸現象における、〈ことば〉と文化の関係を考察できるのである。しかも、例えば、交感的言語使用とか遂行的言語行為のような言葉遣いにおいて考察したように、それは何等かの機会に学習し、身につけたスキルであって、それを如何に行使するかは、それぞれの社会により違いがある。また、社会の変化によって、そのスキルの使い方に違いがある。それは、社会的条件に密接に関係した慣習であり、時に、その社会の文化の一部を構成すると云えるのである³²⁾。

しかしながら、言葉遣いには実に多様な側面がある。我々の言葉では、“地／口／海／す(為)”などの語は、歴史的に文書に残っている限り、古代から変わりなく伝わっている。しかし“うを(魚)”の使われ方には変化があり、今日では“さかな”という呼称が普通である。このような変化は、文化の変容と大いに関係がある。“貴様”という言葉遣いには軽い敬意が込められていたが、今日では、相手をののしる場合が普通である。対人関係の捉え方には変化がおこりがちであり、それが言葉遣いに反映する。

言葉遣いの変化は、しばしば、個人的な様相をしめす。尊敬される(べき)人が使ったのがきっかけで、思わぬ広がりを見せることが起きる。最近の日本では、“認識”という言葉遣いが、“考え”と云えば済むような文脈で使われるが、これはある政治家の気取った言葉遣いが模倣されたものであろう。このような動機付けを文化的と云えるのか疑問で、むしろ、流行に過ぎないと云うべきだろう。

文化と無関係に言葉遣いの変化することは普通の現象である。口蓋垂を

震わせる / r / の発音がパリで流行すると、これが国境を越えてドイツ語に伝染し、デンマーク語など、北欧の言葉に広まったことは³³⁾、その極端な例である。我々の身の周りの言葉遣いにも、言葉の「ごたまぜ状況」³⁴⁾と呼んだ現象があるのだから、文化とは無関係に、何かの言葉遣いが広まるということがあってもおかしくない。例えば、いわゆる「ラ抜き言葉」というのは、文化とは無関係に広まってしまった現象である。これには、一面の合理性が認められないわけではないけれども。発音に関して云えば、「鼻濁音」の使い分けが動揺している現象、また、強めや高さの変化の付け方の変化および世代間の差異は、文化の違いとは言えないだろう。言葉遣いには、文化と無関係な、独自の世界があることを認めなければならない。

しかし、文化がある比較的小さい生活単位をなす集団の生存の形態であるという定義、そして、そのような集団の生存の維持・継続との関係ということと結びつけると、表面的には認められないような文化と言葉の関係が浮かび上がる可能性がある。小さい生活単位における伝統的文化が、外からの強い影響力に容易に侵される今日では、文化が言葉遣いと関連していることを見いだすことが難しくなっている。しかし、本来的には、その結び付きが存在する筈であり、特に文明の影響を何等かの仕方で凌いだところに、そのような結び付きを見いだすことができる³⁵⁾。

IV. 言語と文化の関連

言葉遣いには、必ずしも文化を反映しない側面があることを認めなければならないが、逆に、言葉遣いに文化が反映するのは何故であろうか？ という問を立ててみることも必要である。

それには、言葉遣いの成り立ちを分析してみる必要がある。

繰り返す必要もない事ながら、〈ことば〉は共同社会の構成員相互の結び付きを確保することが第一義的な機能である。従って、〈ことば〉を発話し、受け止めるという相互的な関係に立つ当事者の関係、話し手と聞き手の関係がどの様にして成り立つかが重要である。親子の間の〈ことば〉である

か、兄弟どうしの会話であるか、あるいは、他の家の人との話合いであるか、多様な人間関係のもとに〈ことば〉が交わされる。この条件が言葉遣いに関係するのが普通である。日常的な出来事の繰り返しの途中で交わされる〈ことば〉では、この種の要素が比較的大きな比重を占める³⁶⁾。

しかし、話し手が、どのような言葉遣いをするかを決めるもう一つの条件は、発話の目的である。何のために、何を話すのか？——話題とメッセージの内容が、言葉遣いの組み立て方を決める条件の一つである。今は、他の条件はひとまず措いて、メッセージの内容とその言葉遣いとしての形について、考察をすすめたい。

まず、メッセージが言葉遣いそのものを話題としている場合がある。しかし、これについての考察は後(V節, p.23以下)にして、言葉遣い以外の事柄をメッセージの内容とするような〈ことば〉を考えよう。つまり、我々は、自分と聞き手を含めた人々を話題として、身近の様々な事物について語り、現実には存在しない世界にさえ言及する。そのような言及の対象は、正確さや深かさの違いはあるとしても、一定の了解が〈ことば〉の当事者のあいだについている。つまり、共有する背景的知識と言われるものである。一定の言葉遣いには、共有する背景的知識が結び付いている³⁷⁾。もちろん、話し手と聞き手の共有する知識には、完全な一致を期待することはできないであろうが、互いの了解を阻害しない程の大きさと、共通性の程度が存在する。例えば、「昼・夜」の区別は、全ての人々に共通の背景的知識である。しかし、昼から夜への移り変わりは、緯度が高い地方と赤道に近い地方とでは、相当の違いがある。例えば、エディンバラでは、冬は昼が短く夜が長く、昼間も太陽は黄色く低い位置を移動する。夏になるといつまでも暗くならない白夜がある。一方、シンガポールでは、そのような違いは感じられず、あっという間に夜の暗闇に取り囲まれる。しかし、「昼」は昼であり「夜」は夜である。

人は長い進化の過程を経て、今日の文明の時代に到達したのであるが、昼と夜を区別するように、様々な事物、現象を弁別することで、生存を確保してきたことは事実である。もちろん、文明の高度化にともない、対象

とする事物・現象も複雑さの度合を増すために、弁別の困難な現象にも出会う機会が増えた。また、逆に、科学技術の発達により、直接には区別できなかつた事物・現象が、人工的に弁別できるようになったという側面がある。しかし、宇宙観測においてコンピューターの画面や数値を見るように、基本的には、我々がヒトとしてもっている能力を基本として弁別し、判断を下しているのである。

つまり、ヒトを生き物として存在させているのは、ヒトの身体を構成する様々な器官の働きであり、それぞれの器官は、そこに属する様々な種類の細胞の働きによって機能している。更に、種々の細胞は、それぞれ特有の構造³⁸⁾をなし、互いに他の細胞と結び付き、反発し、作用しあっている。時には、他の細胞の働きを抑制し、消滅させ、ときには、働きを助けて活性化するなど、その仕組みの複雑さをここで詳しく考察する必要はない。

ただ、例えば、アメーバのような単細胞動物でも、摂取する栄養を選び、毒を避け、養分を取り入れることで生きる。もちろん、移動するための、あるいは、繁殖するための機能を果たす部分がこの単細胞動物にあることは容易に認められるが、養分と毒を弁別する作用は、この細胞に固有に備わっている形質であろう。

アメーバは、それ自体で一種の生き物であるが、我々の身体を構成する一つひとつの細胞についても、その環境³⁹⁾との関係の取り結び方には類似のものがあろう。すなわち、我々の身体の数十億の細胞一つひとつは、我々の身体の内部の特定の位置において、その周辺を環境として、そこに共存する他の細胞と相互作用のうちに生き、活性化し、衰退し、死滅するという過程を繰り返しているに違いない。一つの細胞の生命体としての機能は、高度に複雑な我々の身体の内部において、単細胞動物とは比較にならない多様性をもって働いているであろう。

この様な究極の生命体における弁別機能は、ヒトの身体全体の総合的機能を保障し、その一環として、個体としてのヒトがその環境との間に、何等かの関係を取り結ぶことを可能にしているであろう。個体としてのヒトの環境は、かつては他のヒトと自然であった。しかし、進化の結果として、

ヒトは火を作ることが可能となり⁴⁰⁾、様々な技術を身につけながら、他の生き物に類をみない共同生活を営むに到った。かくて、ヒトは人となり、共同生活の自然への依存の仕方が間接的になり、高度化した文明社会での生活を営むに到った。しかしながら、この文明社会は、自然の一部として生存していたヒトに根ざしたものであり、自然との深い関わりの中で学習し獲得した能力の延長である。生命体の弁別機能⁴¹⁾は、様々な形態で、文明社会に生きる人の行動の中に見いだすことができる筈である。

人の弁別機能が最も単純に認められるのは、恐らく、色彩の知覚であろう。色彩は一定の波長をもった光線として網膜を刺激し、神経細胞の伝達機能により、後頭部の大脳皮質に到達して感覚データとなる。これをどの色として判別するかは、後頭部大脳皮質の機能だけでは不足である。そこで受けた刺激が、更に、大脳皮質の他の部位に送られて、他の刺激と同類か別種かの判別が起こり、結局は、一定の色彩を現す言葉遣いが喚起されるというプロセスがある⁴²⁾。

しかしながら、人は色彩の世界に取り囲まれているが、絶えず色彩の弁別に専念している訳ではなく、視覚の対象について、色彩の弁別が重要でないときには、色彩は注意の焦点の周辺において、繰り返し経験される環境の一種として捉えられるであろう。しかし、ある色彩に注意を向ける時には、それに先だって、対象を「何かとして」捉えようとする構えがある。これは、概ね意識には上らない弱い情意的過程の一種であろう。しかし、さらに注意が強まると、対象を「何かとして」捉えることになる。この段階では、「何か」が措定されているが、「他の何か」と弁別されているという意識はない。さらに注意がつよまると、「他の何か」ではない「何かとして」という認識の段階にいたる⁴³⁾。

ここで、「あるものをあるものとして意識する」という認識の段階、真に弁別する段階に至るのであるが、はじめの「あるもの」とは認識の志向する「対象」に他ならず、次にいう「あるもの」とは、その同じ志向対象が、「他のもの」ではなく、この「あるもの」として考えられるという形式をとる⁴⁴⁾。

重要なことは、〈XをX'として〉という関係づけである。これは、単細胞動物においても、その生存のために養分として摂取すべきか否かの弁別を行うための図式でありえる⁴⁵⁾。アメーバにおいても、それが浮遊する環境から摂取すべきものと、摂取すべきでないものを弁別する図式は、これと同じであろう。我々は、もちろん、アメーバの意識などと云うことを想定しているのではないが、それが生命を維持し続ける事実を観察するとき、このことを仮定せざるをえない。

より高等な動物の行動を見るとき、相手を恐るべき敵とみて遠ざかるか、弱い獲物として跳び掛かるか、対象を「(あるもの)として」感じ取る能力を、生得の資質として備えているのである。我々が進化の古い段階でヒトであったころは、これと同じような能力の使い方が普通であったといってよかろう。しかし、石器時代の遺跡から知るところでは、人はもはや自然の一部以上のものになっていたことが明かである。彼らは石を割り、火を作り、素朴ながら技術を獲得するに到る。かくて、彼らにとって、石は単に石ではなくなった。巧みに割り、削り、形を整えて道具として使えるように加工すれば、石は矢じりとなり、斧となり、ナイフとなり、装飾品となった。彼らは、自分達の作りだした加工品を、矢じり／斧／ナイフなどと用途により区別して認識したのである。ここに、また〈XをX'として〉という関係が新たに生まれる。〈X'〉はもはや、自然の有るがままのものではなく、人が生産した道具である。石器時代の人は、この様な認識を得ていたに違いない⁴⁶⁾。

更に時代を下って、人の共同生活集団が移動したり、他の集団と接触したり、あるいは、他の集団の存在を知ったりするようになると、互いの技術の優劣、長所と短所の比較が起こり、より優れた技術とその果実を手に入れたらという願望が生じる。そこに、技術による生産物・道具・装飾品などに新たな価値が生じる。もちろん、自己の集団の中においても重要でない訳はなく、それ故に大きな利用価値はあったといえることができるが、他の集団との関係において、それらの生産物等を互いに手に入れたがるときには、単なる利用価値の上に、交換価値が生じる。〈X'〉は、「利用価値

のあるもの」から、「交換価値のあるもの」としての認識を表示することになるであろう。

この段階に到ると、人の認識の対象は、もはや感覚的認識のレベルをはるかに超えて、多様な認識の総合に達する。時には、あるものは〈石として〉認識されるが、〈ナイフとして〉認識されることも、〈ヒスイの曲玉と交換できるものとして〉認識されることもあることになる。このような、生存形態の複雑化にともなって、認識の様態も複雑になり、〈X'として〉のような図式化を媒介として、ますます複雑で豊かな認識を発展させるに到るのは、自然なことである⁴⁷⁾。

この〈X'として〉という図式は、きわめて融通無礙な特色を有する。例えば、今日の我々にはこじつけめいて聞こえる話しではあるが、歴史以前の民衆にとって、カミ（神）とは人の姿をしたものではなく、靈魂として入れ物で持ち運ぶことが出来るようなものと考えられ、かつ、人前に姿を現さず、谷の奥など目の届かぬ幽遠なクマ（隈）に隠れていた。この二つの言葉遣いはよく似ていて、／k-m-／という枠組みに／a:i／と／u:a／という音を入れ換えたものと受け取ることができる。その上、クマ（熊）も山奥に隠れて、滅多に姿を現さないから、これと関係がある名付けであるという考えがある。事の真偽は別として、本当らしく聞こえるところがある。ここでも、〈X'として〉の図式を当てはめて合理化される可能性がある。すなわち、〈X'（として）〉に代入される項は、文化的に容認されるものであれば、何でも構わないということになる。語彙的・文法的メタファとメトニミーの可能性も、ここに根ざしていると思われる。

このように、人は共同社会を形成して、その中でそれぞれ独自の文化を産みだし、その文化に居心地よく宿って生存するという原型の中で、文化の様々な要素を、この図式に当てはめて認識し、それを言葉遣いに組み込むのである。すなわち〈ことば〉の伝えるメッセージの内容には、一方では、言葉遣いとして組み込まれた独自の文化的要素が、知らずしらずのうちに浸透して、蓄積されて来ざるを得ないのである⁴⁸⁾。〈ことば〉が文化と結び付くのは、この様にして始源的には生き物としてのヒトの生存のため

の生得の認知弁別能力、〈X'として〉と図式化して表示されるような、連続と続く同じ能力に発しながら、それが、進化した人間の共同体における生存の形態においても密接に関連しあっていることを根拠としているのである。

V. 言語の研究と教育

論じ残した〈ことば〉の問題の一つは、さきに言及した、〈ことば〉が言葉遣いそのものを話題とする場合である。既に、交換的言語使用や遂行的言語行為について触れたが、これらの場合には、〈ことば〉の場面が比較的固定していて、言葉遣いも慣用化(institutionalized)しているものである。この慣用から外れないことが求められているとさえ言えるだろう。従って、慣用を無視したり、場面にそぐわない言葉遣いをしたときは、その言葉遣い自体が注意を惹き、対象化される⁴⁹⁾。つまり、言葉遣いについて〈ことば〉を行使する言葉遣いが生まれる。

しかし、〈ことば〉は、これらのような慣用化したものよりも、殆ど無限と云ってよいほどの多様性をしめす。慣用的な言葉遣いは予め発せられることが予期されるのであるが、一般的に、多くは新しい〈ことば〉の連続であり、そこで用いられる言葉遣いの役割も、なにか新しい意味あいを帯びることが多い。この様な多様性に対応するためには、それなりの役割をもったレベルの異なる言葉遣いがなければならない。「言葉遣いに関する〈ことば〉」における言葉遣いである。

この回りくどい表現を整理すると、「言葉遣い(に関する)」は対象化された言葉遣いである。つまり、話し手・聞き手を何等かの仕方で捨象して論じられるように、話し手・聞き手の外にあるもの、外在的な対象としての言葉遣いである。これを「言語」と云うことにする。一方、「(に関する〈ことば〉における)言葉遣い」は、「言語」に関して論じるための言葉遣いであり、それには、一般の〈ことば〉には用いられない言葉遣いが必要になるであろう。これは「メタ言語」と一般に呼ばれるものであるが、言

語学とはこの種のメタ言語の体系である。

しかしながら、どのような学問も、独自の概念と術語をもって語られるものであるから、この点で、言語学が特別なわけではない。しかし、言語学が他の学問とくらべて特徴があるとすれば、優れて人間の学であるという点であろう。これまで「言語」とは云わずに、〈ことば〉という用語で論を進めてきたのは、論じている課題が、メタ言語の体系ではなくて、話し手、聞き手の行為、振舞いであったからである。

今日、我々を取り巻く生活環境の中で経験する言葉遣いの「ごたまぜ状況」⁵⁰⁾は、ある意味では自然な成行きとして生じたものである。程度の差はあるとしても、そのような事は、「言語」として普通の事象である。既に述べたように、「言語」という概念は、〈ことば〉の概念が自然であるようには、自然でない。つまり、それが英語にせよ、日本語にせよ、北欧の諸語にせよ、中国語にせよ、また、トク・ピシン語のようなクレオール語の類にせよ、これを「言語」として一纏めにするとき、そこには人工的な手が加わる。つまり、英語とか日本語と認定される言葉遣いにしても、例えば、夜の月のように、誰もが同じように見ることができる対象なのではない。英語が多様性を含み、日本語が多様性を含み、同様に、他の「言語」も多様性をを含む。それを一まとめにして「言語」というのである⁵¹⁾。

しかし、それでは、「言語」以前の言葉遣いがばらばらであるかということ、そうではない。個人語 (idiolect)⁵²⁾は、個人の癖や性格を反映して独特であり、同じ顔の人がいないほどに、同じではない。しかし、個人語の中には、他の人の個人語と共通の要素が大きな部分を占めている。また、そうでなければならないのである。個人が何等かの意味で同じ集団に属している場合には、その共通要素は「方言的要素」である。

日本人の中には、話し手自身を“ワ”という人たちがいる地方がある。これが、その地方の人々の共通の特徴的な一人称代名詞であるが、このような特徴を共有する人々の集団は、地域的方言の集団である。その人たちは、その他、様々な共通の特徴を示すが、個人語としてみると、何もかも、全く同じだと言うわけではない。少しの差異は無視して、〈XをX'として〉認

識するのである。このように、〈X'として〉認められる特徴の集合が方言である。そして、〈X'として〉認識する能力は、既に述べたように、人に備わった遺伝的素質に根ざすところの能力である。この様にして、「方言」は、「言語」とは違って、人一般の認識能力により弁別可能な特徴の集合であり、ありのまま、そこに存在することを承認して何等の差し支えもないのである⁵³⁾。それは、母から覚えた言葉遣いであり、一人の人の心の中に内在する言葉遣い、生活の場に根ざした文化の宿る言葉なのである。

さらに、そこに有るがままに認められる「方言」の言葉遣いを外在化し、言語学の対象として研究するならば、素朴な言葉の使い手が漠然と感じているような特徴を、鮮明に、正確に、厳密に把握することが可能になる。この様にして、方言集団の言葉遣いの特徴の集合を体系的に記述し、他の複数の方言集団についても同様の検討を加え、それらの諸体系を総合的に比較し、整理統合して、より統一的で一般性の高い言葉遣いの広がり体系的に記述でき、その記述をもとに、個別の方言の特徴を、よりよく説明できるだろうと考えることが可能である⁵⁴⁾。これは、比較言語学がおこなった研究のあり方に類似するのであるが、それと異なるのは、方言こそが、その話し手たちが母語としている実在の言葉遣いそのものであり、彼らの心の中に、間違いなく宿っていると確認できるのに対して、比較言語学の対象は、大部分、古い文献の資料となった〈ことば〉ないし言葉遣いの痕跡である点である。

しかしながら、この様な実在としての方言から出発した比較研究は、明確な姿を現わしていないのが実状である。一般には、虚構⁵⁵⁾である国家語と自己同一化した研究者の個人語を基準として、それとの比較により、方言が国家語の変種であり、下位範疇であるという位置づけのもとで、個別的特徴を収集するという研究が行われている。方言学や方言地理学における体系的記述は、多様な資料を素材とし得る国家語の体系的記述より規模が小さくならざるを得ない。

研究者自身が収集した多様な資料による実証的研究やコーパス言語学的研究などは別であるが、このような「言語」研究のあり方の特徴は、いま

触れたように、多くの場合、研究者自身の〈ことば〉を依りどころとし、自分の言葉遣いを「国家語」と同一化し、研究者自身の個人語を外在化し、意識の対象に見立てて観察を加える。これが、個人語とその方言に妥当する方法であることを忘れるばあいは、虚構の実体化の誤りを冒すおそれが大きい⁵⁶⁾。最も一般的で普遍的であると主張される分析の結果が、個人語の内省・内観に基づく場合が普通である。研究者が、様々な言葉遣いを想定して判定を下す場合、対象として措定しているのは、研究者が思い浮かべた言葉遣いであり、それに判定を加えるのは、研究者自身である。全てが、研究者の内部で起こっている事になる。

すでに述べたように、〈ことば〉は母語として獲得するものである。言葉遣いは、生後の成長の過程で、内面化され、記憶の中に蓄積されながら一人ひとりの中で発展する。一方、〈ことば〉は生得の能力でもある。それは、高度に発達した精神作用ではあるが⁵⁷⁾、生き物としてのヒトに備わった資質が具現したものである。繰り返しになるが、ヒトは、進化の過程でこのような資質を獲得したのであろう。そして、ヒトの遺伝子に特徴的に配列されている素子は、身体の〈ことば〉と関係のない様々な部位においても作用し、また、他の生き物の体内においても作用している。このような遺伝的資質として獲得した生得の能力に〈ことば〉を還元することは適切であろうか。そのような一般化を試みるならば、恐らくは、〈ことば〉が存在しなかった進化の段階に我々を引き戻すことになるであろう。その原初のヒトの段階においては、我々の〈ことば〉という振舞いを説明する要素を見いだすことは不可能である。

さて、個人語にしても、方言にしても、それを言語学的に把握するための方法論として、一定の手続きがなければならない。その手続きの総体が言語理論である。方法論は、既述のように、「言葉遣いについて語る〈ことば〉」の言葉遣いである。従って、何等かの意味で、個人語、方言、虚構としての「言語」と無関係ではない。一般の日常的言葉遣いを用いて全てを論ずることが可能であれば、それに越したことはないが、言語学のように、その研究自体を目的とするのとは、日常的言葉遣いでは次元がはるかに異

なる。そこで、言語学には、メタ言語のシステムとしての特徴が生まれる。そして、メタ言語システムを構成する術語が、まさしく母語、個人語、方言の特徴を指示し、説明するならば、それは虚構とは云えないだろう。例えば、大きい範疇だけを挙げるが、音声、音韻、語、文法、文体などである。しかし、変形、痕跡、論理形式などに、単なる仮説以上の実在性があると考えると⁵⁸⁾、とんだ思い違いを冒すことになる。

また、言語が構造をなすという考えはきわめて魅力的である。すでに、〈ことば〉と言葉遣いの「ごたまぜ状況」ということに言及したが、その混沌の居心地わるさに較べれば、整然とした秩序の与える晴れ晴れとした心境が望ましいというのは、日常生活の感情である。〈ことば〉と言葉遣いが、個人語や方言において、一定の秩序を成すであろう事は十分に期待できるであろう。それは、内在化した言葉遣いが、人に賦与された弁別能力によって知識として整理され、関係付けられ、〈ことば〉として具現しやすくなっていると考えられるからである⁵⁹⁾。それは、他の道具的存在や文化財の場合を考えれば容易に理解できるであろう。

しかし、このことは、同時に、構造が完全なものではあり得ないということも意味するのである⁶⁰⁾。言語という観念は虚構であるという場合、同時に、言語が構造体をなすという観念も虚構であることを意味するのである。虚構である事が無意味であるとか、虚偽であるという意味ではない。「言語」の概念は、そのような構想を創りだした考え方を現すだけのものであり、そのとおりの実在が想定されていると考える事が適切であるという意味である。というのは、上述の事の中に含意されているのであるが、現実の言葉遣いの総体である方言には、ある時点におけるシステムの側面と同時に、それが絶えず動揺し、変化し、不完全であることを免れないという特質が含まれているからである。システムの側面とは、方言の要素的諸特徴が互いに何等かの関係を取り結んでいるという意味である。一方、不安定な面とは、現実の時間の中に具現化する〈ことば〉が、過去との不可分の関連を免れない事を意味するのである。

従って、個人の精神に内在する構造体のみを抽象して、それ以外の全て

を無視するという方法は、これを究極まで押し進める場合には、虚構の実体化に陥る恐れがある⁶¹⁾。ソシュールが、言語活動(langage), すなわち、我々の謂う〈ことば〉の総体が混質的でありすぎるため、科学的研究の対象としては、そこから抽象した記号のシステムである言語(langue)を中心に置き、個人的な言葉遣いを別の概念、すなわちパロール(parole)として周辺に位置づけたと言われる。この方法論により、〈ことば〉の内包する時間・歴史の要素が一旦捨象されるが⁶²⁾、「言語」が「言語活動」からの抽象であることを全く無視するならば、ヒトからの進化の段階における人の諸能力を切捨てて、虚構の「言語」を独走させてしまうことになるであろう。

さて、研究者が自分の母語から離れて、虚構である「国家語」に実体性を与えようとするならば、特定の方言を国家語として代表させるか、様々な方言の要素を取り込んで、人為的に規範としての「言語」を示すかのいずれかである。前者は他の方言の話者にとっては外在的であり、後者は政策的生産物としての虚構である。また、チョムスキーの所謂“I言語”などは、理想化された内在的言語という、別な種類の虚構である⁶³⁾。

外国語に関していえば、それは、常に外在的な言葉遣いとして目の前にどんと置かれた課題である。これに対して、聞こえず、見えず、ないものとして関与しない無関心な態度をとることはできる。しかし、本稿の冒頭で言及したように、外国語をスキルとして身につけることが、社会的に求められている状況がある。母語でない外国語を、母語と同じように〈ことば〉として構想することは、実体を伴った諸要素の関係(システム)としての母語に対して、実体を伴わないシステム、つまり、虚構としての言語を、どの様にしてか、実質としての〈ことば〉へと変換する手だてを含めて考えることである。この手だての中で中心的な位置を占めるのは、抽象化したモデルとしての規範であるが、それに従って〈ことば〉を実現するのは、あくまでも、個々人の心身の活動である。個々人のこのような活動は、抽象的なモデルが内面化していなければ具現化しない。一方、規範が内面化するためには、心身の適切な活動の繰り返しが必要である。スキルは学

習により獲得され、反復と工夫により向上する。規範はある意味で知識であるが、手続き的知識であるからである⁶⁴⁾。

このような外国語の教育・訓練にとって重要なのは、学習者の目的意識(モチベーション)の強さであるが、規範と〈ことば〉の関係を正しく認識した教授者の介在と、〈ことば〉としての自然(authentic)⁶⁵⁾なサンプルの提示が条件となろう。サンプルとしての適当な外国語話者の存在意義は大きい。そのようなサンプルの経験を通じて、規範を内面化しながら〈ことば〉のスキルが徐々に向上するのである。

結 び

以上のような考察を根拠に、文化を省みると、言葉ないし言語が文化と深く関わるのは、いずれも人の生存の形態の故であることが明かになる。文化の非言語的な側面を言語的側面と区別したカウツキーの論には、岡野(1997)で言及したが、人の精神活動が他の生き物とは比較にならないほど複雑化・多様化・高度化したことは、生き物として備えた生存のための能力の延長線上にある。複雑な概念の総合は、〈XをX'として〉他と弁別することの積み重ねの中で生まれたに違いない。そして、生存の条件の中で、自然と人間同士の関係を取り結ぶ過程が諸文化を産み、かつ、〈ことば〉を発達させてきた。その発達が、また、自然と人間同士の関係に反映して、文化と〈ことば〉を高度化するというスパイラルな循環が起こったと仮定して間違いなからう。

〈文化と言語〉を並べるとき、それらは、全体として人の生存の営みであり、その果実である。ただ、岡野(1999)で述べたように、ある社会集団の文化は、時に発展しつづけるとしても、また時に、より普遍的で優位にある他の社会の文化 — 文明というべきシステム — により凌駕される。そして、消滅しないまでも、残るときはその意味を変えて残る。

これに対して、〈ことば〉は集団のメンバーに生存者が居なくならないかぎり⁶⁶⁾、文化の盛衰、文明の影響をすべて乗り越えて生き残る。〈ことば〉を生み出すシステムとしての言語は、世代を越えて受け継がれる柔軟性を

持っている。システムとしての内在的言語は、時に要素を替え、関係を修整しながら、人がこの地上にある限り、人と共にありつづける。〈ことば〉は人である。 (2000.2.5.)

註

*) 本稿は、岡野(1997)及び岡野(1999)に続く論考である。これらは、本学部で「言語と文化」と題する講義を担当する上で、自らのために基本的立場を明確にする必要から、敢えて専門外の領域である文化・文明論に踏み込んだものである。本稿も、これらと同じ目的意識のもとに意図されたものである。しかし、付け加えるべき事柄があり、整理が不十分であることを考えて、上記の2稿と共に未定稿としたい。

- 1) 岡野(1997), p.3f.
- 2) 同書, p.21.
- 3) 純粹に言語学的な視点の多くは、註の中に書き留める。
- 4) 多言語国家における共通語教育その他の経費について、フロリアン(1993, pp.117); 二か国語教育のための費用について(同書, pp.125ff.); 外国語教育と母語教育の経費について(同書, pp.131ff.); 言語計画と言語の輸出振興対策(同書, pp.136ff.); 国際機構内のコミュニケーションに要する経費(同書, pp.149ff.); 民間部門での言語関連支出について(同書, pp.153ff.)など参照。
- 5) E-メールの言葉遣いが、オン・ラインとオフ・ラインでは、結束構造、語彙項目の選択、修辭的特徴(文体や交感的言語使用の要素)でかなり異なることが研究調査の結果として明かになっている(cf. Weasenforth, D. and Sigrun Lucas(1997)). まして、ワープロなどの使用と鉛筆・ペン・筆などの使用で違ってくるのは明かである。全く偶然であるが、この註を執筆中に、井上ひさし等の作家が、作品の執筆にワープロの使用をやめた事、ならびに、その理由が記事として公表された。『週刊朝日』2/12号, 2000年. pp.135ff. 参照。例えば、井上は云う:〈ワープロで打った文章は低調でしたね。字づらが当たり前でツルツルしている。……〉また、歌人の道浦母都子は〈ワープロで書いた文字には体温がなく、自分の言葉のように思えないんです。自分の心の動きとは違うし、思考の仕方も変わってしまうのでワープロをやめました。…〉と語っている。さらに、石川(1999)は、〈この筆触の現場は、言葉の側からいうと、思考の現場でもある。前もって出来上がった言葉を筆記具

で書きつけるのではない。筆尖と紙(対象)との力のやりとり、つまり筆触、すなわち「書く」ことを通じて、否、「書く」こと自体が考えるのだ。> (p.66.) と強調している。

- 6) McKnight (1928), pp.56ff. など参照。
- 7) 市場と言語について、フロリアン(1993), pp.23ff. 参照。また、北海道の古代遺跡でさえ、北陸地方の糸魚川周辺から産出するヒスイの玉が発掘されたという事実は、縄文時代の太古から、人びとが広域的に交流していたことを物語る。そこでの、物々交換の様態はある程度想像ができる。
- 8) 例えば、松山(1997)によれば、ウェールズにおける母語から英語への移行をもたらした〈決定的要因は、工業化にともなう社会的変化であった。産業社会の中で英語が商業・ビジネスの言語として支配的領域を拡大し、より優位な位置づけを得たことに加え、工業化による大規模な人口の移動が言語状況を大きく変化させた〉(p.265)。イングランドから英語の母語話者が労働者として大量に移住し、〈英語がコミュニケーションの手段として多用されるようになって〉、ウェールズ人も、バイリンガル状況をへて、英語モノリンガルへと徐々に移行した。この推移は、人口が密集している都市部で速やかに起こり、農村でも徐々に英語への移行が進んでいる。以下、註16) 参照。
- 9) クレオール化の、限界的接触→土着化→優勢語からの影響→ポスト・クレオール連続体→黒人英語などへ到る諸段階については、ドット(1986), pp.101~128. 参照。
- 10) 例えば、朝鮮戦争等の際に、朝鮮半島で一時用いられたバンブー英語など。クリスタル(1992), p.483. 参照。
- 11) 米田(1997)は〈民族語とスワヒリ語は用途が相補分布したダイグロシアの関係にあると言われてきた(……)。しかしながら、スワヒリ語の浸透に伴って用途の境界線は曖昧になり、この関係は次第に崩れてきている〉として家庭と民族コミュニティにおける使用言語を調査し、表に示している(pp.319f. 参照)。その中で明らかになるのは、家庭環境の中でおこる公用語による母語の侵蝕である。
- 12) イ・ヨンスク(1996)はいう：〈江戸時代に…、江戸に各地の武士や商人がはいりこむことによって、「独り江戸ばかりで言語の混合が出来」た。そして、「東京語」はこの「江戸言葉」の利点を……。〉(p.60.)ここに言う様な〈混合〉を以下においては「ごたまぜ状況」と表現することにする。さらに、井上(1998)も参照。
- 13) 〈ピジンの特徴であった単純化された言語構造はクレオールにうけつがれ

るけれども、クレオールは母語であるから、人間の経験のあらゆる分野を表現できなければならない。したがって、その語彙は拡大され、より精巧な統語体系が発達することが多い。> (ドット (1986), p.8.) なお、ピジン・クレオール語の書き言葉ならびに教育用語としての使用については、ドット (1986), pp.133ff. 参照。クレオール文学については、シャモアゾー+コンフィアン (1995) 参照。

14) 井上 (1998) 参照。

15) McArthur (1992) s. v. STANDARD ENGLISH, etc., pp.980ff.

16) ウェールズは十六世紀前半にイングランドに合併されたが、十九世紀半ば、英語を媒体とした学校教育が強制された。しかし、英語を母語とする子どもに対するのと同じ教育法で当たったために、英語教育は殆ど成果をあげることがなかった。一方、ウェールズ語による読み書きの教育が非国教会派の日曜学校で行われたが、十九世紀後半に教育令が改正されて、イングランドとおなじ体制で試験制度が導入されたために、機械的な詰め込み教育がひろまり、時にはウェールズ語の使用禁止と、日本では沖縄の標準語教育にみたような罰札のような方法さえ用いて「英語」の徹底が図られた。しかし、英語の習得には結び付かず、しかも、ウェールズ語母語教育の衰退をもたらした。松山 (1997) 参照。今日、アメリカ合衆国における英語と異言語との教育・文化的関係上の問題は、<English-only policy>として表面化している。Peterson (1999) など、参照。

17) イ・ヨンスク (1996) <「国語」とは、始めから存在している事物ではなく、近代国家に適合する言語規範をもとめる意志がつくりだした価値対象なのである。> (p.93.)。

18) イ・ヨンスク (1996) の言うように <言語についての表象の問題>として、<地理的・階層的な言語変異にまったく汚染されていない処女性をもった言語規範がどこかに存在するはずだという表象>は虚妄な憶見であって、<そのような無臭で無色透明の言語体などというものは実在しない。> (p.49.)つまり、一人ひとりの日常生活の視点からみれば、外在的である。

19) 上註 16) 参照。

20) 「一国家・一言語」の理想が、近代国民国家のイデオロギーとして生まれ、そして、かつて植民地であった地域で、独立を果たす上で大きな意味をもった。インドの場合、ヒンディー語を実質的に「公用語」として位置づけ、精神においては「国家語・国民語」として考えた。かくて、ヒンディー語と英語の二言語使用の状況から、新聞・雑誌などの使用言語としては、ヒンディー

語の方が優勢になりつつある。しかし、英語が「世界語」として通用している状況から、今日では、地域語としての各州の諸地域言語、国家語・国民語としてのヒンディー語、国際語としての英語という三つの層があると説明できる。鈴木(1997)ならびに、上註18) 参照。

〈タンザニアは、アフリカ固有の言語であるスワヒリ語を国家語として定め、その普及を促進してきた。…… スワヒリ語の著しい浸透の陰に、衰退の過程に追いやられている130以上の民族語の存在がある…〉(米田(1997))。

これらの事例は、公用語でも民族語でも、それらが混在する状況のもとで、全く統一された一体感のある存在としての「言語」を考えることのむずかしさを理解させる。

- 21) 民族語の使用領域が狭まると、その運用能力が低下してくる。さらに、国家語との間にダイグロシアの関係がない場合、最終的には、学校や政治の言語が家庭や近隣の言語に取って代わるといふ。米田(1997), pp.323ff. 参照。タンザニアの例では、スワヒリ語がかって公的言語であった英語に代わって社会的役割を担うことにより、〈英語は一般の人々の生活から全く遠ざかってしまっている。中学校以上の高等教育では媒介言語として英語が用いられているが、中学校への進学率が低い上、英語を媒介言語とすることで導きだされたのは、「英語運用能力の向上」ではなくて、英語運用能力の不足に起因する「学力の低下」であった。〉(米田(1997), pp.328ff.)。

これらの事例は、国家語にせよ母語にせよ、本来的には、内面化して定着した状態になれば、運用が不十分なレベルに落ち込み、その文化的機能を十分に発揮しないことを意味すると思われる。なお、民族語の根強い内面化の実例については、萱野(1996)ならびに岡野(1997, p.26.) 註42)を参照。

- 22) 胎児の成長過程の総括的把握は、ラフラー＝エンゲル／本名・加藤(1993), pp.6～10. による。生物医学的には〈妊娠の第三期で聴覚器官が機能しはじめることが明かにされており、胎齢25週の胎児が音に反応する〉(同書, p.139.) といふ。〈イントネーションは身体のリズムと深い関わりをもつ。そして、この身体のリズムは、異文化が接する際に非常に重要な要素となる…〉(同書, p.136.)、言語の身体性については、酒井(1997): 〈膨れあがった間接的な関係に包囲され、閉じ込められ、窒息させられつつある私たちから見れば、中世の人びとの自前のやり方は、たいへん魅力的である。そこでは、人間の身体力というものが、生き生きとした生命力をもっている。よく聴く耳(聴耳 [キキミミ]) やよく利く口(利口 [リコウ]) に大きな価値がおかれてい

る。……彼らは、人間の身体がもっている能力をフルに発揮し、等身大の世界を手離さず、対象との直接的な関係を失わずに生きている。それにひきかえ、私たちは今、……> (pp.217f.) のような感慨の中に顕著である。

- 23) <幻想を生み出したものはランガージュで、共同幻想はラングと同じ本質・構造をもち、いまだ共同体内に沈澱していない私的幻想はパロールで……。<ランガージュは幻想を作る能力なのですが、本能ではないんですね。しかし生得能力ではある。>……<実体的な進化説ではないにしても、文化的に作り上げた獲得形質がやっぱり遺伝してきている…> (丸山(1993:p.180)) という言説に認められる進化論的視点に興味を引かれる。

また、ポパー (1995/96) が、ヘレン・ケラーの事例から、言語学習における模倣・試行・誤りの排除の生起を学び、これを一般的認識の過程に措定した (1995,p.88) 1920年代以来、ほぼ40年後、ダーウィニズムの形而上学的解釈に到達し (1996,pp.127ff.), 人間の心を<非常に発達した身体器官であるかのように> (ibid., p.168.) 考えてみることに、そして、<人間世界の諸対象を産出し> それと<相互作用する> ものと見なすこと、<人間の心を、とりわけ人間言語> <理論や批判的議論、そのほか誤り、神話・物語・警句・道具・芸術作品といった多くのもの> (ibid., p.169.) の生産者と見なすことを提案しているのは注目される。彼がいう人間言語とは、基本的に生得的性向に根ざすものである。

- 24) 交感的言語使用 (phatic communion) については、Malinowski (1923), pp.315ff. 参照。
- 25) 遂行的言語行為 (performative speech act) については、Searle (1969) pp.66. など参照。
- 26) 内山 (1998) <たえず目的内在性と全体的連関性のもとに「熟練」や「コツ」をつなぎとめた仕方では技術を考えること> (p.16.) および時枝 (1941), pp.103ff. 参照。彼は<価値及び技術を離れて言語は存立せず、価値及び技術こそ言語の生命である…> (p.106) と言うが、その‘技術’とはもちろん近代科学技術ではなくスキルの意味である。
- 27) 参照:<Capability of accomplishing something with precision and certainty; practical knowledge in combination with ability; cleverness, expertise. Also, an ability to perform a function, acquired or learned with practice (usu. pl.)> -*OED* (1989²) s. v. skill, sb¹ . 6. a.
- 28) 岡野 (1999), pp.2ff.
- 29) 岡野 (1997), pp.16ff.

- 30) 岡野 (1999), pp.8ff.
- 31) McArthur(1992)によれば、マン島で話されていたケルト語の一つ Manx 語は最後の母語話者であった Ned Maddrell が 1974 年に死亡して消滅した。但し、文字化する保存運動は続いているという (同書, p.426.) しかし、ここでは、特定言語ではなく、行為としての〈ことば〉を念頭に置いていることに留意されたい。
- 32) この種の現象は、交感的言語使用に特に顕著である。挨拶の仕方など、文化により異なる。
- 33) クリスタル (1992), p.50.
- 34) 特に、井上 (1998) 参照。
- 35) 萱野 (1996) 参照。氏の発言の記録については、上註 21) 末尾と同様に、岡野 (1997, p.26.) 註 42. を参照。
- 36) 場面の脈絡 (context of situation) の特性については、Brown and Yule (1983), pp.35ff. 参照。
- 37) 次の様な異言語話者間の交流の成立は、言語的な共通点と文化的な共通点 (=共有する背景的知識) が重なりあって、互いの了解が容易であった為である。〈おもに八世紀から十一世紀にかけてヴァイキングとアングロサクソン人の言語が接触したとき、文法は似ていたし、かなりの量の語彙も同じであった。伝達に必要な共通の特徴は身近にあったので、ゲルマン語に共通する多くの特徴はそのまま残された。それにもかかわらず、この接触の結果、アングロサクソン語は単純化の過程を経ていった。そして、ピジンを生んだいくつもの接触状況のなかで英語が姿を変えていった極端な単純化と、英語史に起きたこの過程を較べてみると、2つの単純化の過程の違いは、程度の問題であって、本質的なものではないと言える。〉 (ドット (1986), p.14.)
- 38) 〈人間が動物と共有する、シンボル操作以前の感覚=運動的分節によって生まれる第一のゲシュタルトを、市川浩氏の用語を借りて「身分け構造」と呼ぼう。これは動物一般がもつ生の機能による種特有のカテゴリー化であり、……生体による一種の意味構成であって、決して自然の中にア・プリオリに存在する普遍的・物理的な構造ではない。ダニにはダニ固有の…、そしてヒトにはヒト固有の「身分け構造」〉 (丸山 (1993 : pp.98f.) [括弧の使い方は変えてある]) がある。しかし、ヒトにしてもダニにしても、種に固有の「身分け」という感覚=運動的分節化があることには、変わりがない。
- 39) 環境の概念は、言語学では、音韻の異音が生起する〈環境〉など、一般的な概念である。また、人間社会での生活〈環境〉の善し悪しなどを論じるこ

とは日常的に起きる。「生物個体と環境の次元」に限らず、「小は器官・細胞・分子・原子・素粒子といった次元」においても論じられ得る。更に、自己活動的なものが内在する〈環境〉は、発生論的にはまず、能動的に働くものの周囲の環境場として区分されるであろう。廣松渉(1993), pp.221. & 223. 参照。

- 40) 進化のどの段階においてであるかは触れないことにする。
- 41) 「弁別」という音韻論的な用語を借用しているが、ある程度これは「差異化活動」と言い替えられるかも知れない。丸山(1993), pp.78~90. ならびに上註38) 参照。
- 42) 視覚のプロセスは、ここでいう程単純なものではなく、難問がまだ未解決であるということを念頭におかなければならない。クリック(1995) 参照。
- 43) 知覚のこのようなプロセスについては、Cherwitz and Hikins(1986 : p.92f.) の論述にも見いだされる。ただし、そこは一種の導入部であって、関係性を基礎とする存在論にたちながら、意識に上る表現の形式での説明にとどまっている。なお、次註44) 参照。
- 44) 〈あるものをあるものとして〉という表現は、表象の結合という課題を説明するに当たって、中嶋文雄(1949), pp.142ff. などに用いられている。その論述における問題点については、岡野(1994), pp.207ff. で詳しく論じ、関係の項の实在を関係の实在に先行させる場合、突き詰めると無限後退に陥る危険を暗示した。廣松渉(1979), p.176. においては、「xを(a)として知覚する」(ibid., p.148) という構造において、所与「x」の次元と、既に被述定的な措定態となっている「x als (a₁)」(a₁として措定された与件x)の次元とを混淆する」過誤に警告が発せられ、「或るもの」においては、既に現前している「或る」もの(et-was)という二肢的構成においては、関係が項に先立つ第一次性(ibid., p.66)において理解されねばならないという(同書, p.71.参照)。この二肢的構成体として捉えられるものの「自己同一性」(p.73.)は、函数としての同一性であり、例えば、「枯尾花」を「幽霊」とみる時、このような「函数的な或るもの」(p.147.)としての把握があるとする。本稿では、このような意味で、「～として」を函数的な関係の表示として用いている。
- 45) 上註38) 参照。
- 46) 中嶋(1939)はA.マルティに従って [cf. Marty (1976), S. 435 u. folg.], 概念の分類を5つとし、その第5を〈要素的概念の総合によりなる [druch Synthese gebildete] 表象〉とし、その発生は、〈賓述判断(二重判断)の反

省による〉としている。カント (1961 : pp.127 & 217f.) は、〈我々の一切の表象をすべて含んでいるような総括者〉によるものであり、かかる総括者はとりも直さず〈内感と内観のア・プリオリな形式であるところの時間〉であるという。そして、〈表象の総合は構想力に基づき、表象の総合的統一は統覚 [=自己意識] の統一に基づく〉とする。構想力は図式 (スキーマ) を作り出す。例えば三角形のスキーマは、思考のうちに存在し、〈構想力による総合の規則を意味する〉が、スキーマについては、〈人間の心の奥深い処に潜む隠微な技術であって、我々がこの術の真の技倆を自然について察知し、これをあからさまにすることは困難であろう。〉という。なお、参照：Körner (1955), p.71.

- 47) このような図式化が進化の過程で複雑に組合わさり、複雑な認識が展開すると考えるならば、カントが〈あからさまにすることが困難〉だとしたものを、マルティ＝中島流の概念総合や賓述判断の〈反省〉によって、解決しようとするメンタリスティックな二元論に固執する必要がなくなるのではないかと思われる。
- 48) 〈ことば〉という用語に固執するのは、〈人間は、ランガージュの所有によって動物と断絶し、二つのまったく質を異にする構造、すなわち種のゲシュタルトと文化のゲシュタルトの中に生きるという考え〉 (丸山 (1993, p.98)) における〈ランガージュ〉を、一般に「言語」と云って済ませるに忍びないからである。
- 49) Chomsky (1986) は、本稿で「言葉遣い」とよび、一般に研究対象とされている言語を〈E-language〉とし、“externalized”の意味を〈understood independently of the properties of the mind/brain〉 (p.20.) なる構造体と説明する。
- 50) 英語史の上では、十六世紀は、ルネサンスの人文主義の影響を受け止めて、混乱の中に英語を今日あらしめるような激しい運動があった。という事は、中世の英語抑圧の時代を抜け出して、なお、新しい世界に対応するだけの準備が完了していない段階での「ごたまぜ状況」が存在したことを意味する。これについては、McKnight (1928) Chs. V～X (pp.70-212)参照。
- 51) イ・ヨンスク (1996) によれば、〈「この方言の集合体が即ち日本語であって、此以外に日本語と称する、特殊のものが存在して居るわけではない」 [保科孝一] のである。それでは、「国語」が「方言」の集合体であるなら、「国語学」はすなわち「方言学」の集合体になるのだろうか。〉 (p.224.) という発想があり得る。

52) Ellis (1966) は、方言的・レジスター的文体差との関連で、個人語に細心かつ厳密な注意を払っている。

一方、Chomsky (1995) は、‘例えばジョーンズ氏 (say, Jones)’ という形で、あたかも個人語を論じているように書き始めているが(p.14.)、程なく彼の姿は消えてしまう。筆者に読み落しがなければ <by providing a grammar for Jones, …> (p.19.) が最後であろう。おそらく、ジョーンズ氏とは、Chomsky (1965) が冒頭でいう ‘an ideal speaker-listner’ (p.3) と同一化しても差し支えないだろう。

しかし、柴田 (1998) のような言語学者は、自分の言葉遣いが個人語として意識され、それが国家語や他の方言と一致しないことを、しばしば、明言している。例えば、‘洗濯’ をどう読むかについて、<わたくしたちの名古屋のことばは> と断わり書きをして、生活のことばとしては <名古屋も上方のはしぐれだから> 「せんだく」であると述べている (p.142.)。まことに周到である。

53) 中嶋 (1939) は云う：<故に存在するものは方言的言語習慣のみで、全方言に君臨する日本語一般というようなものは抽象にすぎない。かかる抽象物を実体化する傾向を促進するのは謂わゆる標準語の書記号の統一である。……言語の実状は標準的書記号から盲目的に統一的言語の存在を推論する人々が考えるより遥かに複雑である。(p.183.)

54) 上註 51) において引用された保科孝一の言説を参照。

55) 森 (1997) において、“フィクション” という用語は、政治学の分野で用いられることが紹介されている。この用語は“作為”とも (p.234)、また、“虚構”とも (pp.244ff.) 言い替えられる。なお、上註 18) 参照。

56) 中嶋 (1939) は云う：<ソシュールの議論は無反省に言語、概念、聴覚映像等の抽象名詞を実体化し、その上に象徴的な思惟を行っているに過ぎない。そのような思惟の産物は観念的構成物、虚構であると言わざるを得ない。……。しかし「言語」なる概念が考えられるということは、直ちに言語なるものが存在することにはならないのである。> (p.168) なお、前註 55) 参照。

57) チョムスキーの普遍文法生得説に対する最も説得力があり、かつ、生産的な反論は、ディーコン (1999) に見いだされると思う。彼は云う：<チョムスキー一派は……因果関係を逆にしている。彼らは言語獲得の事前条件を、他には考えられないという言外の理由で脳の内部にあらねばならぬとした。しかしもう一つの手がある。言語学習を援けるものは……。実に脳の外、言語自身の中にある。> (p.111.) <いかなる特定の言語もせいぜいファジーな統

計的な実体で、言語全体はさらに無規定であることからすれば、生物とのアナロジーは言語をあまりにも自立的かつ個性的に取り扱うことになるかもしれない。しかしそれでも多くの並行性がある。例えば言語をつくる語と規則は、一つの集合体の単なる要素ではない。生物の遺伝子や器官のように、高度に組織的で相互依存的である〉(p.122.)〈言語は抽象である。それはほどほどに論理的な規則システムを有する行動のファジーな集合である。それも一個人の母国語についてならばそのように概ね論理的であるが、英語でも日本語でも、その話し手の全体集団に共通なこととなると、統計的なクラスターだけになる。生物学的な種や社会的集団のほとんどの特性がそうであるが、一つの社会集団に共通な言語も、類似してはいるが同一ではない言語の集まりである〉(pp.122f.).

ディーコンが「言語」という用語を曖昧に使っているが、この文脈からは、本稿における「〈ことば〉」、「言葉遣い」、「言語」の意味に使い分けられていることを読み取るのは難しくない。

58) 上註 55) ならびに 56) 参照。

59) 上註 57) 参照。

60) 下註 63) における Jespersen (1946), pp.11-23. 参照。

61) ソシュール／小林英夫訳『一般言語学講義』(1972)の読み方には問題があることは、いろいろな方面から指摘されている。廣松渉(1979), p.189. では、ソシュールが《intelligence collective》という概念を立てているのは、〈事実上、——パロールの主体と区別した次元での——ラングの主体を立てている〉のだと見なしている。一方、田中(1997)は、彼をくとりわけ、言語がひとえに心理的存在であることを強調する点で、かれは全く青年文法派の中に身を置いている。〉(p.7.)と指摘しているが、しかし、同時に、フランソワズ・ガデの著作に言及しながら、彼女が「ソシュールが教えるのは、人間はおのれの言語(ラング)の主人ではないということだ。」と述べていることも〈鋭い指摘〉として紹介している。

なお、田中(1997)は、『講義』の末尾で、特に強調的に「言語学の独自・真正の対象は、それじたいとしての・それじたいのための言語である」と述べられていることを〈私にとって今のところなぞであり、解答を見出せないでいる〉(同書, p.15.)と告白しているが、彼はそれが編者バイイとセシエエが付け加えたものだという事は、知っているのである(同所)。本稿においては、この点に深入りする用意はないのであるが、彼とその疑問を共にするものである。というのは、田中(1997: p.19.)が指摘しているソシュールの民

族精神観のごとき側面が、《ethnisme》の観念において表現されていることを認めざるを得ないからである。しかも、バイイとセシュエが付け加えた結語をふくむ最後のパラグラフの直前のパラグラフにおいて、あたかも、構造主義全体と全く相容れない概念が《le “génie,, d’une race ou d’un groupe ethnique》という表現で、むしろ、肯定的に表現されていることに注意を引かれるのである。それが、ラングを導いて、ある決まった道から反れないようにする（《ramener sans cesse la langue dans certaines voies déterminées》）という言語の進化の法則（《sa loi d’évolution》）を信じているかのように、シュライヘルとは別の意味で、ラングを有機体と見なしたい（《nous continuons, …, à vouloir en faire une chose organique》）と述べられている。

『講義』の訳者小林英夫は、この箇所の注釈において、わざわざ、《nous》にはソシユールが含まれていないこと、それが〈啓蒙されていない人びとをさす〉（ソシユール, F.ド／小林英夫訳(1972), p.471.)と指示することによって、『講義』の一貫性を保とうと努力している。本稿では、フランス語の一人称複数代名詞が、話し手・書き手（一人称単数）を除いた指示対象に適用されるのか否かを検討することはできないが、訳者の注釈はかえって疑いを抱かせるものである。『講義』がバイイとセシュエの目を通して間接的に解釈された面を含むソシユールであることが明かである今日、小林英夫の注釈は不必要ではないかと考える。

- 62) 参照：廣松渉(1979), p.190. 〈厳密に議論する際には、言語形象は発話され、聴取的に理解されるその都度“生産”(再生産)されると言われねばならず、「意味」についても亦しかりである。……謂わばメタ・レベルで存立するにすぎない。……〉

また、〈レトリックが、もはや古典的な修辞学の目ざした‘代行・再現’的手段の探求ではなく、真の‘表出’としての創造行為であること……〉（丸山(1993:p.85.)). なお、言語の時間・歴史性は、構造の同様な未完性を意味するであろう。それ故に〈ことば〉は創造的であり得るのであり、認識論的意義（Cherwitz and Hikins (1986), 参照）をもつのである。

- 63) Chomsky (1987) によれば、普遍文法の対象である〈I-language〉は、次のように説明される：〈the language as what we may call “I-language,” where “I” is to suggest “intensional” and “internalized.” The I-language is what the grammar purports to describe: a system represented in the mind/brain, ultimately physical mechanisms that are now largely un-

known, and is in this sense internalized; a system that is intensional in that it may be regarded as a specific function considered in intension - that is, a specific characterization of a function in the mathematical sense - which assigns a status to a vast range of physical events, including the utterance ……> (pp.36f.) という。

彼はこのような〈I-language〉の概念を, Jespersen (1924) の〈free expression〉 (pp.18ff.) と結び付けている (Chomsky (1987, pp.21ff.)). Chomsky は, これを自分の意図する創造性と一致させようとしているが, Jespersen は, 無定形文などの様な〈formula〉に対立させて〈free expression〉と言い, それ, が, 単なる記憶に依存する前者に対して, 発話の都度, 一定のパターンに語を挿入するなど, 時にはかつて言ったことのない部分も創造的に含む文をつくる事に着目しているだけである。彼は, その創造的な側面について〈that is of no importance for our inquiry.〉と言い, 重要と見なすのは一定のパターンである事を〈What is essential is that in pronouncing it he conforms to a certain pattern.〉 (p.19.) と断わっているのである。

そればかりでなく, 最晩年における多少回顧的な論文, Jespersen (1941) の中で, J. R. Firth の小著 *Speech* (1930) [Firth (1964) の後半部] を評価して, 〈his valuable little book〉と言っている (p.77.). これをもってしても, Chomsky (1986) においては, Jespersen を深読みしているか, 都合よく借用していると思われぬ。

Jespersen は, また, J. R. Firth (1951) と同様に, デカルト的な心身二元論には組しなかったであろう。というのは, Jespersen (1941) は, かつての激しい批判 (Jespersen (1946), pp.11-23.) をいくらか和らげながらソーシャルのパロールとラングの区別に依然として同意しないことを表明し, その上で, 言語における抽象度の階層に言及している。即ち, (1)〈ことば〉 (speech); (2)個人語; (3)個人と仲間に共通の言葉遣い; (4)地域の方言; (5)国家等の言語; (6)人類共通の言語能力 (〈the power of using language common to all mankind, what Saussure called *le langage* as distinct from *la langue*〉) (pp.13f.).

一方, Firth (1951) は, 心身二元論に陥ることを警戒して言う: 〈My own approach to meaning in linguistics has always been independent of such dualisms as mind and body, language and thought, word and idea, *signifiant et signifié*, expression and content〉 (p.227.).

さらに, Firth (1948) は, 言語の身体性と文化との関連を念頭において言

う：〈We need to know a good deal more of the action of the body from within and especially of the nervous and endocrine systems. But from what we already know it is clear that we must expect human knowledge to be a function of that action. Language and personality are built into the body, which is constantly taking part in activities directed to the conservation of the pattern of life……〉(p.143.).

また、Firth (1950) は、本稿でいう〈ことば〉について言う：〈Language and personality partake of both nature and nurture and are the expression of both. I am not now using the ‘language’ in any Saussurean sense. I use the word ‘language’ without article, in three principal senses according to context.〉(p.186.) そして、1) 音声を発し、身振りや合図をしようとする生得の衝動 (the urges and drives in our nature)；2) 社会生活の中で生育することにより習得し維持している言葉遣いの伝統的システムないし習慣 (この意味では体系的であり、社会の構成員がそれぞれ能動的に保持するのは、それが身体的システムのおかげで発生し、持続するからである)；3) 社会での使用により生じる無数の出来事の総体として考えられるもの (= speech) の区別が認められる。

Firth (1964) では、自然と社会の一体化としての〈ことば〉が、‘SET’ という概念で次のように語られる：〈For linguistic purposes, therefore, we do not separate nature from nurture, but refer to a man’s set of instincts, urges, sentiments, interests, abilities, and the general patterns of his behaviour, and particularly to those which mark him out as a type, or as belonging to a social group whose members behave rather alike. We may call these ‘conditioned’ forces of flesh and blood which manifest themselves in the details of specific behaviour the ‘set’ of the personality, or quite simply ‘set’.〉(pp.89f.).

このような Firth の立場と Jespersen の立場が如何に近いかを読み取るとは容易である。この両者は、ソシュール流の構造主義にも、チョムスキーのデカルト的二元論にも組しないことは明かである。

また、糟谷 (1997) によれば、チョムスキー派の根拠の一つである「デカルト」的な一般文法に対して、ポール・ロワイヤル文法以後に発展を示したロックの経験論を理論的出発点とした一般文法があったという (pp.36ff).

64) 上註27), ならびに、市川伸一他 (1994), pp.20f. および pp.28ff. 参照。該当箇所における「手続き化」などの概念は、Anderson, J. R. *The Architec-*

ture of Cognition. Harvard U. P. 1983.による。

65) 'Authentic' の訳語については、安藤(1991), s. v. AUTHENTICITY. 「自然度」を参照。

66) 上註 31) 参照。

文 献

安藤昭一編 (1991). 『英語教育現代キーワード事典』 増進堂

Brown, Gillian and George Yule (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge U. P.

Cherwitz, R. A. and James W. Hixson (1986). *Communication and Knowledge: An Investigation in Rhetorical Epistemology*. Univ. of South Carolina Press.

Chomsky, Noam (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.

Chomsky, Noam (1986). *Knowledge of Language: its Nature, Origin, and Use*. Praeger.

Chomsky, Noam (1987). *Language in a Psychological Setting*. Sophia Linguistica. No. 22. Sophia University, Tokyo.

Chomsky, Noam (1995). *The Minimalist Program*. The MIT Press.

ディーコン, テレンス・W./金子隆芳訳 (1999) 『脳と言語の共進化：ヒトはいかにして人となったか』 新曜社 [Deacon, Terrence W. *The Symbolic Species: The co-evolution of language and the brain*. W. W. Norton & Co. 1997.]

ドット, ロレット/田中幸子訳 (1986) 『ピジン・クレオール入門』 大修館書店 [Todd, Loreto. *Pidgins and Creoles*. Routledge and Kegan Paul. 1974.]

Ellis, Jeffrey (1966). On Contextual Meaning. Bazel, C. E. et al.(eds.) *In Memory of J. R. Firth*. Longmans. 1966, pp.79-95.

Firth, J. R. (1948). The semantics of linguistic science. Firth, J. R. (1957) pp.139-147.

Firth, J. R. (1950). Personality and language in society. Firth, J. R.(1957) pp.139-147.

Firth, J. R. (1951). General linguistics and descriptive grammar. Firth, J.

- R.(1957) pp.216-228.
- Firth, J. R. (1957). *The Papers in Linguistics 1934-1951*. Oxford.
- Firth, J. R. (1964). *The Tongues of Men & Speech*. Oxford U. P.
- フロリアン, クルマス/諏訪功他訳 (1993) 『ことばの経済学』 大修館書店
- 廣松 渉 (1979) 『もの・こと・ことば』 勁草書房
- 廣松 渉 (1993) 『存在と意味』 第二巻 岩波書店
- イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想 近代日本の言語認識』 岩波書店
- 石川九楊 (1999) 『二重言語国家・日本』 日本放送出版協会
- 市川伸一他 (1994) 『記憶と学習』 岩波書店
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 岩波新書 540 岩波書店
- Jespersen, Otto (1924). *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin.
- Jespersen, Otto (1941). *Efficiency in Linguistic Change*. Ejnar Munksgaard.
- Jespersen, Otto (1946). *Mankind, Nation and Individual from a Linguistic Point of View*. George Allen & Unwin.
- 糟谷啓介 (1997) 「一般文法の政治学」: 田中克彦他編 (1997), pp.21~46.
- 萱野 茂 (1996) 『萱野茂のアイヌ語辞典』 三省堂
- カント, I./篠田英雄訳 (1961) 『純粹理性批判』 (上) 岩波文庫 6397 岩波書店
- クリスタル, D./風間喜代三・長谷川欣佑監訳 (1992) 『言語学百科事典』 大修館書店
- クリック, F./中原英臣・佐川 峻訳 (1995) 『DNAに魂はあるか』 講談社
[Crick, Francis. *The Astonishing Hypothesis: the Scientific Search for the Soul*. Charles Scribner's Sons. 1994.]
- Körner, Stephen (1955). *Kant*. Penguin Books.
- Malinowski, B. (1923). *The Problem of Meaning in Primitive Languages*. Supplement I, Ogden, C. K. and I. A. Richards. *The Meaning of Meaning*. Routledge & Kegan Paul. 1923. Pp.296~336.
- McArthur, Tom (ed.) (1992). *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford U. P.
- McKnight, George H.(1928). *Modern English in the Making*. Appleton-Century-Crofts.
- 松山明子(1997)「ウェールズにおける英語の普及——国家語の拡大と教育言語

- 政策——」：田中克彦他編 (1997), pp.254~268.
- Marty, Anton (1976). *Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeinen Grammatik und Sprachphilosophie*. Georg Olms Verlag.
- 丸山圭三郎 (1993) 『文化記号学の可能性』 夏目書房
- 森政 稔 (1997) 「言語／政治学」：田中克彦他編 (1997), pp.226~253.
- 中嶋文雄 (1939) 『意味論』 研究社
- 中嶋文雄 (1949) 『文法の原理』 研究社
- 岡野 哲 (1994) 『英語と英語教育』 近代文藝社
- 岡野 哲 (1997) 「文化と文明——「言語と文化」考(1)」北海学園大学『人文論集』 No. 9, pp.1~29.
- 岡野 哲 (1999) 「文化・文明と技術——「言語と文化」考(2)」北海学園大学『人文論集』 No.13, pp.1~30.
- Peterson, Iver (1999). 'English is the American Dream's starting point.' *Asahi Evening News*. Oct. 26, 1999. p.8. [Originally in *the New York Times*.]
- ポパー, K./森 博訳 (1995/96) 『果てしなき探求 知的自伝』上・下 同時代ライブラリー 248/256 岩波書店
- ラフラー=エンゲル, W・フォン/本名信行・加藤三保子 (1993) 『胎児は学ぶ』大修館書店
- 酒井紀美 (1997) 『中世のうわさ：情報伝達のしくみ』 吉川弘文館
- 柴田 武 (1998) 『日本語はおもしろい』 岩波新書 373 岩波書店
- シャモアゾー, P+R.コンフィアン/西谷 修訳 (1995) 『クレオールとは何か』平凡社 [Chamoiseau, Patrick and Raphaël Confiant. *Lettres créoles: Tracées antillaises et continentales de la littérature 1635-1975*. Hatier, Paris, 1991.]
- Saussure, Ferdinand de, (1955⁵). *Cours de linguistique générale*. Payot.
- Searle, John R. (1969). *Speech Acts*. Cambridge U. P.
- ソシュール, F.ド/小林英夫訳 (1972) 『一般言語学講義』 岩波書店
- 鈴木義里 (1997) 「国家と州の公用語——インド=グジャラート州の公用語を手がかりとして——」：田中克彦他編 (1997), pp.291~317.
- 田中克彦・山脇直司・糟谷啓介編 (1997) 『言語・国家・そして権力』 新世社
- 田中克彦 (1997) 「言語学の日本的受容」：田中克彦他編 (1997), pp.3~20.
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
- 内山勝利 (1998) 「技術と目的性」：『世界思想』 25号 世界思想社

Weasenforth, D. and Sigrun Lucas (1997). On-Line and Off-Line Texts of Non-Native Speakers: Distinguishable Text Types? [<http://gwis.circ.gwu.edu/~washweb/Lucas.html>]

米田信子(1997)「民族語に対する言語政策とその影響——タンザニアの事例から——」：田中克彦他編(1997), pp.318～335.